

情 報 局 編 輯

週 報

昭和十九年六月二十一日
六月二十一日發行
水曜、日發行

激動す 東西兩戰線

六月二十一日號

斷乎、驕敵を撃摧せよ
海軍志願兵の募集開始
第二戰線展開

400號

五錢



週言

戦争遂行のため重要な仕事をしてをりながら、世間に知られぬ人たちが各方面の職場にゐる。

船の奥底で火を焚いてゐる機関夫、人の眠つてゐるとき通信機の鍵をたいてゐる通信士、航行の安全を圖る孤島の燈臺守、狭い室内に閉ぢこもり輻湊する話を連絡してゐる電話交換手、決戦輸送の機關車を動かす機關手、火夫など、數へあげれば際限がない。

この人々は黙々として與へられた仕事を天職とし、或ひは生命を危険にさらし、或ひは疲労に屈せず困憊に負けず、心身をむちうちつつ、ひたすら自己の職責を全うするために闘つてゐる。

自己の仕事を天職として、心不亂にこれをやり通す境地こそは、日本人としての至高至純の生活態度であり、これこそは日本精神の發露である。我々は常にかゝる人々の困苦と努力を思ひ、己が身をこれに引きくらべ、我は果してその職に勵精して、御信倚に應へまつり居るや否やを省みることが肝要である。

斷乎、驕敵を擊擢せよ

敵、本土に迫る

歐洲第二戦線の爆發によつて、世界の耳目は恰もこの一點に集中したかの觀があるが、眼前脚下の太平洋戦局は、それによつて少しも重要性を軽減したのではない。むしろ、その比重はますます昂まりつゝあり、現に六月十四、十六兩日の大本營發表は、雄辯にこれを物語つてゐる。右發表によれば、

一、六月十一日、有力なる敵機部隊マリアナ諸島東方海面に出現し、同日午後から十三日午前五つてサイパン、

十二日には一部艦艇を以て砲撃した。これに對して所在の我が部隊は、敵艦一隻を撃沈、敵機百二十一機以上を撃墜、三機を撃破し、我が方の損害は輕微であつた。

二、マリアナ諸島に來襲した敵は、十五日朝に至り、サイパンに上陸を企圖したが、前後二回これを水陸に撃退した。敵は、更に同日正午頃三度來襲し、今なほ激戦中である。

三、二方また敵の機動部隊は、十五日午後、小笠原諸島に來襲し、父島及び硫黄島を空襲したが、所在の我が部隊はこれを撃退、敵機十七機以上を撃墜した。我が方の損害は輕微であつた。

四、十六日午前三時頃、支那方面からB

大本營海軍報道部

20、B24二十機内外、北九州地方に來襲した。これに對して、我が航空部隊は、直ちに激撃、その敵機を撃墜してこれを撃退した。我が方の損害は極めて輕微であつた。

といふのである。敵は、

一月 三十日 マーシャル諸島
二月 十七日 トラック諸島
二月 二十二日 マリアナ諸島
三月 二十九日 パラオ諸島
四月 三十日 トラック諸島
五月 二十日 南島島
五月 二十四日 大島島
六月 十一日 マリアナ諸島
六月 十五日 小笠原諸島
と本年に入つてから前後九回、空母、

戦艦を基幹とする機動部隊をもつて米襲したが、侵寇と侵寇との時間的差異が次第に短縮される傾向にあることも、その期間内は、基地航空部隊、空母艦載機等を総動員して、各方面から間断なき爆撃を實施してゐる實情で、今や敵は、機動部隊と基地航空部隊との合體せる大機動力を縦横に駆使して、一舉に中部、南部太平洋の制空海權を獲得すべく、一大空中攻勢を展開してゐるのである。

- 二月 二一、〇四機(中部太平洋)
- 三月 一八、三二九機(同右)
- 四月 二四、〇九七機
- 五月 三三、七六四機

なる太平洋全戦線に對する敵機の來襲機数は端的にこれを實證するもので、米海軍航空作戦部長ラッドフォードの言を借りれば、

「今太平洋戦域においては、一千機以上の大編隊で對日攻撃が出来ることが常識となつた。米海軍がかかる作戦を實施し得ることは、決して誇張ではない。」

と、米航空戦力の増強を誇示して、まづ何よりも第一に、太平洋の制空權を確保しようとする必死の反攻を企ててゐるのである。

熾烈なる敵の反攻企圖

こゝで太平洋最近の戦局を一瞥してみよう。

一、中部太平洋

僅か一ヶ月間に、南島島、大島島、マリアナ諸島を三回も敵の機動部隊が襲撃し、十五日には、サイパンに對して強引な上陸を企圖したが、ニミッツ攻勢が、比島を経て南支那に達するものだとする以上、敵は必ずやまた力を新たに出来襲するものとみねばならない。去る四月二十七日、南太平洋艦隊の解散に伴ふニミッツ、マックアーサー共同作戦の強化が發表されて以來、ニューギニアの西進陸上作戦と我が内南洋に對する海上侵寇作戦とは、一段と緊密

相關の度を加へた形で、長遠に伸びきつた補給力の維持増勢のために、「現在、真珠灣の海軍基地で取扱つてゐる補給品の量は昨年七倍に上つてゐる」(太平洋艦隊補給部長ガフネー言明)とのことであり、また基地擴充のために「米海軍工作隊は、強力な攻勢基地を建設するために、西方へ移動しつつある」(海軍工務長船渠局長モーレル言明)とも傳へられてゐる。

二、南太平洋

ラバウルに對する敵の爆撃は、依然熾烈を極めてゐるが、所在の我が陸海軍部隊は士氣ますます旺盛、果敢なる迎撃戦を展開してゐる。なほ最近、ブイン、ブカ島方面に敵機の來襲が激化したことが注目される。

三、ニューギニア

敵が四月二十二日、ホーランドイア、アイタベに上陸以來、同方面の戦局はとみに奇烈化し、すでに同地の飛

行基地を使用してゐる模様で、敵はさらに同月下旬、アイタベ、ウエック中間のウラウに一ヶ聯隊、五月中旬トル河口、同十八日ウクデ島、同二十日サルミに上陸するほか、ウエック北方のニゴ島及びグンダヤにも上陸、または上陸を企圖したが、

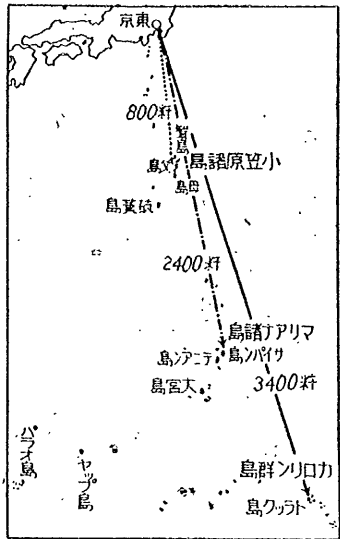
五月二十七日には一ヶ師團強の兵力を以て、ピック島に上陸を開始し、今日なほ増援部隊を注入するとともに、必死の補給を續けて反攻してゐる状況である。

これ等の敵の侵寇に對して、我が陸海軍部隊は断乎、猛攻を加へてゐるが、トル河口口では、ホーランドイア方面から轉進した部隊とともに強襲を反復して、敵一ヶ師團の大半を殲滅した。

なほマノクソリに對する敵機の來襲が最近顯著である。

四、南方資源地帯

マックアーサーが奪回を企圖する同方面に對する敵機の來襲も漸く積極化の兆を示し、四月十九日、開戦以來はじめてスマトラ島サバンに敵の機動部隊が出現したが、五月十七日、またもや機動部隊がインド洋に出現



して、東部ジャワを戦艦五十機を以て空襲し、その一部がスラバヤに來襲した。スマトラ、マライと海上侵寇を呼號するマウンテンバッテンは、四月十六日、ニューデリーから軍司令部をセイロン島カンデーに移駐せしめて

をり、インド洋方面における敵艦隊の動き等からみて、この方面からする敵機動部隊の反攻は警戒の要がある。

五、印 緬

我が陸軍部隊の先制攻撃によつて開始された同方面の戦局は、ブチド、モンドウ、インバール、コヒマの各方面において、日印兩軍による緊密な共同作戦を展開中である。

六、支 那

四月十八日陸軍部隊によつて開始された河南作戦に次いで、五月二十七日からは湖南作戦が矢張り展開されて、敵の反攻企圖に對して先手先手と機先を制する攻勢作戦が續行されてゐる。これに對して在支米空軍の奮闘は依然執拗を極め、十六日には不退にも、北九州に來襲、開戦以來、我が本土に對して第二回目の空からの挑戦を試みた。その狙ひが重

第二戰線展開



同志漲る盟邦ドイツ

反俄軸軍の西歐侵攻作戦は遂に開始された。去る六月六日早曉、突如として北佛ノルマンディー一帯に降下した空挺部隊によつて、まづその火蓋が切られたのである。

掛聲が久しかつた第二戰線の決行だけに、全世界の耳目は一齊にセーヌ海岸に集められ、展開する彼我攻防血戦の凄絶さに、じつと固唾をのんで凝視を續けてゐる。

まさに歐洲の運命を左右する世紀の血戦であり、我々にとつても正に重大關心事である。

空を蔽ふあの飛行機の屋根の下を、そして無砲射撃のトンネルの中を上陸して来た米英軍にとつても、國家の興亡を賭けての一戦であらうが、遠へ撃つドイツ軍にとつては、正に戦局の轉換をはかるべき絶好の機會である。過去一年餘に亘り、東部戦線に苦

しい隠忍の撤收作業を續けて来たのも、憎い米英のテロ爆撃に、無辜の市民が殺戮され、貴重な文化の殿堂が破壊され、大小五十餘の都市が廢墟となすのを、じつと齒を喰ひしぼつて堪へ忍んで来たのも、すべてはこの侵攻に備へ、この西方の敵を叩き潰すためだつたのである。すべては、西の要塞を固め、海を渡つて來寇する敵を徹底的にやつつけるためだつたのである。

いまこそ待ち設けてゐたところへ、ちやうど準備が整つた頃に、敵が群をなしてやつて來たのだ。ドイツにとつてはまさに思ふ處である。

かつてヒトラー總統は、第二戰線展開に對する反俄軸側の誇張した僞舌に對して、「來らば來れ、たゞドヴィツァーの海底に敵屍を築くのみ」と斷乎たる所信を宣明した。

いまやその時が來たのである。斷じて討つべし。しかして醜虜どもを海底深く葬り去る好機が到來したのである。

グッペルス獨宣傳相は六日、

「われは獨婦女子を殺戮したものの咄々たるを憐むであらう。われわれ獨人は一人残らずこの考へに憑かれてゐるのだ。

けふは四年前ダンケルクの悲劇が演ぜられた日だ。われは敵に第二のダンケルクを現出せしめようと呼望してゐるのだ。

と述べて、全ドイツ國民の鬱結した憤激を端的に吐露し、陸軍當局もまた、

「その日はつひに到來した。過去數週間全歐を蔽つてゐた緊迫した空気が、やうやく解けようとしてゐる。獨軍はイタリヤ戦線の場合とは異り、敵と著るしく違はない物景的條件の下に決戦を交へることが出来るのである。獨軍特兵は反俄軸軍の上陸を迎へて、待望の敵軍いよく來ると簡潔に決意を表明するだけだ」と述べて、敵撃滅の決意を言明し、

當前の責任者である西歐地區獨軍總司令官ルントシュテット元帥は、「我が西

部獨軍には後退作戦なし」と、驟然上陸軍を遣へて起つたのである。精強ドイツ軍の満々たる自信と、敵を殲滅せんばやまざる固い決意の程がうかがへるであらう。

慘たる上陸第一歩

上陸開始の日時については、かねて全世界の論議の的となり、あらゆる角度から検討された擧句、だいたい月、潮の關係から、五月上旬から六月上旬にかけてが上陸の好適期であるとみられてゐた。これは折柄の満月のために干満の差が少く、上陸用舟艇に都合がよい上に、午前零時頃には月が全くかくれて闇夜となり、舟艇が海を渡るのに絶好である。たゞ夜明けが早いから、闇夜のうちに橋頭堡をつくり、夜明け後には艦艇を張つて後続上陸部隊を補充するといふ段取りであつた。

さらに敵は國民士氣の昂揚の上から、ローマ攻略の時期を狙ふだらうと

もみられてゐた。

なほこれについて反俄軸側では、あまりに宣傳が過ぎ、遂にエービー通信社がアメリカに向けて誤報を出したため、ニューヨークの或る野球場では、折柄試合見物中の一万の觀客が、嚴肅に座席から立ち上り、一分間の黙禱を捧げたといふ笑へぬ事件までもち上つた。

ところで常識的な目を選ぶことは、一つの謀略戦法なのかもしれないが、敵は六月六日といふ日を選んだ。しかもこの日は、故意に選んだのかもしれないが、彼等には忘れ得ぬあのダンケルクの敗退戦からちやうどまる四年目である。

午前一時、折柄の闇夜を利用して、お五の夜光布を標識とする約二万の空挺部隊が、海を渡つて北佛ノルマンディ地帯とセーヌ河口高地附近十數ヶ地點に分れてまづ降下侵入したのである。

それから約二時間遅れて、強力な聯合艦艇勢力に擁護された十数ヶ師の陸上部隊が、ルアーウルからシェルブルにわたる約百五十キロの英佛海峡沿岸一帯にかけて、上陸を企圖して来た。

かねてこの日を期し、嚴戒の眼を光らせてゐたドイツ沿岸砲臺が一齊に猛火を噴き始めたのはいふまでもない。

漆黒の海上を救を衝んで迫る敵上陸用舟艇の群を、出来るだけ手元になぐり寄せて、轟然と浴びせる熾火の激しさ、沿岸防禦施設の凄まじさ、この言辭に絶する恐怖の地獄圖繪を、次ぎに身をもつて體驗した敵報道班員達の口から聞くことしよう。

「余は上陸地點にたつた三十分しかゝなかつたが、海岸の模様は地獄よりもつと凄かつた」と形容すべきであらう。余はアンチオ上陸作戦にも参加したが、今度の侵入作戦に比較すれば全く問題にならない。ドイツ沿岸守備隊の砲火は實に物凄かつた。場所によつてはドイツ軍は反樞軸軍が海岸に到着するまで全く沈黙

を守り、十分手元に引寄せたから、これに猛烈な砲火を浴びせてきた。

「死傷が海軍に出た来たものだけで七百五十名、ほかに同数がその後、満潮で海中に流れ去つた」

と。この上陸戦闘がいかに慘として目を蔽はしめるものであつたかが窺ひ知れる。

一方、十数ヶ地區に降下した空挺部隊も、勇猛果敢なドイツ守備軍の攻撃をうけて、その大半は殲滅され、特にカーン南方地區に降下した英第六空輸師團のごときは、すでに生存者が少くなつたといはれるほどの潰滅ぶりである。

この甚大なる損害に對しても反樞軸側は例によつて頰被り主義をとり、この被害を小さく發表してゐるが、スヴェンスカ・ダグブラデット紙のロンドン特派員の報道によると、「英本土にはすでに續々と負傷者が後送され、ロンドンの醫者は大部分は徵用され、自動車で海岸の某地に送られた。負傷者を

満載した船は間断なく英海岸に到着しつゝあり、醫者は手當に忙殺されてゐる。英南部海岸地方の住民は、上陸作戦の被害が極めて甚大であつたとの印象をうけてゐる」とのことである。

反樞軸軍、橋頭堡の確保に汲々

かくして敵上陸部隊を待ち設けたものは苦戦の連続であり、散々な痛手を受けたのち、幸うじて二ヶの橋頭堡の設置にまで漕ぎつけたのである。

英軍によるオルヌ河以西地區と、米軍によるコクタン半島のサント・メー・ユグリーズを中心とする東岸地區とである。このほか米軍はコクタン半島の西部海岸にあるクークンズとレーサーの間にも空挺部隊を降下させたが、獨軍のため殲滅された。

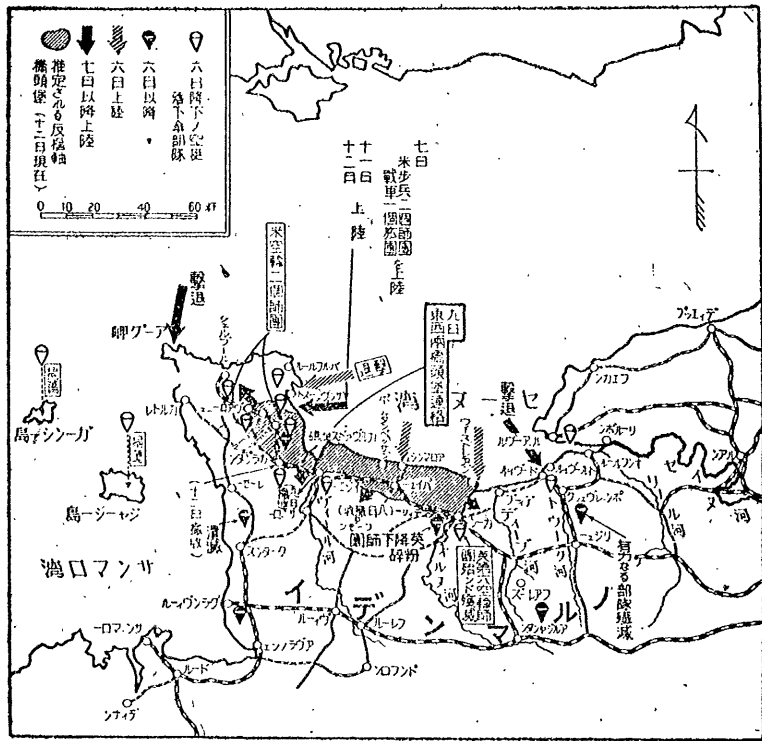
この上陸陸軍部隊は、英軍、カナダ軍、米軍と成つてをり、英軍地上部隊の司令官であるモントゴメリーが指

揮に當つてゐる。

英軍は主としてヴィール河以東地區、米軍は主としてヴィール河以西地區からコクタン半島一帯を擔任してゐるやうである。

反樞軸側の作戦目標は、まづ兩地區の橋頭堡の擴大をはかつて互に連絡し、英軍はカーンを攻略してオルヌ河以東地區に進出してルアーウルを奪取し、米軍はサンローを突破してクークンズに伸び、コクタン半島をその基地部において切斷し、シェルブルをルアーウルと共に、自軍の補給港とせんとするもの、やうである。

かくして反樞軸軍は、辛うじて獲た橋頭堡を足掛りとして、その後、後綴部隊をその左右に上陸降下させ、この飛石的據點を連絡して橋頭堡の擴大をはかり、ドイツ軍の猛攻に潰されながらも、老大な兵力と物量に物をいはせて、兵力を注ぎ込み、有力な戦車部隊も揚陸し、獨軍もまた戦車部隊を繰



り出し、彼我の攻防は次第に激化の様相を呈しつつある。

殊に熾烈を極めてゐるのはカーン周縁と、バイユー南方のサンローに通ずる道路の兩側と、カラントン西南方面で、兩軍の死闘は凄絶を極めてゐる。

ドイツ軍は、セーヌ地区では八日にバイユーを、九日にイジニエを、コタン半島地区では十二日にカラントンを、いづれも敵に多量の出血を與へたのち撤收し、艦砲射撃圏外の新陣地についた。

敵の大軍を十分内懐に牽きつけて、一舉に撃滅するといふ根本方針からみて、ドイツ軍は目下のところ、最小限の兵力をもつて、將來の決戦に有利な態勢を整へてゐるものとみられる。

かくて反樞軸軍の橋頭堡は、上陸一週間後の十三日にいたり、オルヌ河口以西からコタン半島のヴァローニユに至る幅八十キロ、深さ一〇一

六キロの一帯の帯状をなすにいたり、爾後兵力の増強と共に、その周邊地區に向つて橋頭堡の擴大に必死の努力を傾けてゐるのである。

敵の兵力と獨の作戦

未曾有の大規模のもとに強行された上陸作戦に、使用された兵力はまた大なるもので、英首相チャーチルが六日午後、下院で述べた戦況報告によると、「英佛海峽横斷に四千以上の艦船と、數千の上陸用舟艇を使用、米英空軍は一万一千の第一線機を動員、上陸部隊は英軍ならびにその他の反樞軸國軍で編成されてゐる」とのことである。そして一週間の出動延べ數五万六千機と豪語してゐる。

獨側の見解によると、上陸當初は戦車三個師を含む約十二個師程度とみられてゐたが、その後、逐次増強されて十三日現在、約二十個師、四十万程度になつた模様であるが、このうちの七、

八個師團が英第六空挺師團のやうに殆んど大半を撃滅されて、戦争能力のあるものはだいたい十數個師團とみられ、なほ獨軍は、最初の四日間に、約二十万トンと推定される敵艦船を撃沈破し、最初の二週間に、反樞軸軍の飛行機七百二十餘機、滑空機千臺以上を撃墜したと發表してゐる。

このほかに、敵側報道にまれば、モンゴメリーは、なほ英本土南部に約二十個師を有し、アイゼンハワーは、なほ英本土東海岸からスコットランドにかけて待機中の約五十個師を有してゐると豪語してゐるが、この主力を敵はどうしようとしてゐるか、これが問題である。

この戦局に對處し、ドイツ軍は如何なる作戦を考へてゐるのであらうか。

れを撃滅するにあり。北フランスの戦局はすべてこの角度から眺めなければならぬ。」と語つてゐるところによつても、その企圖は推察できるのである。

第二戦線展開の肚裡

想へば、第二戦線の歴史は古い。昭和十六年六月二十二日、獨ソ開戦で東部戦線が「第一戦線」となつて以來の歐洲の、否、全世界の課題であつた。同年秋十一月六日、ソ聯革命第二十四周年記念日に、スターリン首相は

「歐洲において對獨第二戦線の缺如は獨軍の状態を著しく樂にしてゐることは疑ひを容れぬ。第二戦線の出現は、無條件に、最も近い將來出現せねばならぬ。それはソ聯軍の損害を軽減するものである云々」

と、突然第二戦線を要求するに至つて、この問題は反樞軸側の頭痛の種ともなつた。

當時は英軍がダンケルクの大敗を喫した後でもあり、アメリカは参戦前

であつたので、宿題として見送られてゐたが、同年末、大東亞戦争の勃發と共に、ドイツの對米宣戦により、歐洲戦争も新段階に入るや、ソ聯は米英側に對し強硬に第二戦線を要求するに至つたのであつた。

そこで翌十七年五月の英ソ條約、六月の米ソ協定締結となり、ソ聯の強談判で「米英は同年中に第二戦線結成につき意見の一致をみた」といふコミニケ發表とまでなつたが、同年秋における反樞軸軍のアフリカ上陸はソ聯からは第二戦線と認められず、年を越した。

第二戦線の約束不履行をめぐつて、米英ソ間の政治的關係は頗る微妙な關係に置かれ、ソ聯はこれを漸に東部戦線の對獨反撃の進展と相まつて、バルカンから地中海、アフリカ、西南アジア方面にまで外交、政治的進出を著々と進めて來た。

本書は、日本出版會社「第二」推薦圖書
著者 大島正義 大島正義 大島正義
編輯 大島正義 大島正義 大島正義
印刷 大島正義 大島正義 大島正義
發行所 大島正義 大島正義 大島正義

いで第二戦線を一寸延ばしにして来た米英のことであるから、今回の上陸作戦もソ聯を援けるためよりも、むしろ「これ以上放つておいて、ソ聯が今後さらに歐洲に赤色勢力を伸張するやうになつては困る」といふ利己的の都合主義と、歐洲にアングロサクソンの世界支配體制を確立しようといふ野望に基づくものであることは十分想像できることである。

従つて敵米英は、この北佛上陸作戦といふ武力攻勢と並行して、依然として、否、一段と執拗に、歐洲各國に對して政治的、外交的攻勢と巧みな謀略宣傳を行つてゐることを看過してはならない。

戦線二つならず

しからば、かゝる第二戦線の展開がわが大東亞戦局に如何なる影響をもつであらうか。中には、「いくら物量を誇る敵米英でも、これだけ大規模な第二戦線をやり出したら、相當こたへるだらうから、太平洋並びに東亞戦域は手

薄になりはしないか」と考へる者もあるかもしれない。しかしそれは餘りに現實を放れた甘い觀測に過ぎない。敵が西歐に大兵力を機動したといつても、それは數年來、この作戦のために蓄積され、用意されてゐたものであり、殊に使用された海軍力に至つては、英海軍を主力とし、米海軍の如きは戦艦、三隻といふほんの一部が使用されてゐるのみで、大部分は依然として太平洋にあり、別項記事の如く對日反攻に蠢動してゐることを忘れてはならない。

歐洲上陸作戦開始に先立つ六月一日、敵アメリカの參謀總長マーシャルは、太平、大西兩洋作戦をやるために、本年末までに現有兵力七百餘万を九百五十万に、航空兵力百九十万を二百萬に、またこれが輸送に要する船舶を四千万トンに擴張すべく、一切の準備を完了したと發表してゐた。敵の宣傳をそのまゝ鵝呑にする必要はないが、敵はすでに兩洋作戦の肚をきめて準備を整へてゐるばかりでなく、むしろ現

在の敵アメリカの國民感情からも、太平洋第一主義に傾いてゐることが推察できるのである。

米太平洋艦隊司令長官ニミッツは、「太平洋戦域の米海軍は、艦船も、兵器も十分であり、たゞ必要としてゐるのは作戦を實施するに要する時間のみである」と豪語し、機動部隊の充實を誇示して

「太平洋戦線と歐洲戦線とは最早や相互に影響する如きことはなくなつた」とまで揚言してゐる。

この敵の思ひ上つた戦勝への妄信、道義も理性もない自己の世界制覇の野望を心ゆくまでたゞきつけ、彼等をして戦争を思ひ止まらせるためには、ただ戦闘において徹底的に彼等を撃ちのめすことである。

彼等は多分に自信たつぷりに、思ひ上つた戦争をしてゐる。そして得意な謀略宣傳の助けを借りて、實際以上に、

さういふ印象を與へることに成功してゐるやうである。

しかし、彼等には大きな弱點がある。まづ第一に、名目の立つはつきりした戦争目的を持つてゐないことである。第二に戦争観が異ふから、人的損害に大きな危懼を抱いてゐることである。従つて彼等は損害についてひたすらかくしてゐる。

第三に、彼等の勝利への期待は機械と物量を基盤としてゐるといふことである。従つて物に對する自信を失つたとき、彼等の精神的崩壊は想像に餘りあるのであつて、それにつけても我々の生産戦、科學戦の重要性が痛感されるのである。

撃て、共同の敵

盟邦ドイツの敵は、いふまでもなく我々の敵であり、日獨樞軸は同じ目的を以て、同じ敵と戦ひつゝあるのである。我々は盟邦ドイツがこの好機を

捉へ、敵撃碎に必勝することを確信すると共に、我々自らも歐洲におけるドイツと共に、太平洋において、大東亞戦域において、敵米英撃滅の機会をつかまねばならない。

ともあれ、第二戦線の展開を轉機として、世界戦局は更に決定的な段階に突入した。しかしそれはまた我々樞軸にとつては、敵の反攻を邀撃して勝機をつかむ絶好の機会でもある。すでに盟邦ドイツは、ヒトラー總統の下に、全軍の士氣いよく昂揚し、その持つる絶大なる戦力を隨所に發揮し、勇戦敢闘をつゞけてゐるのである。

我々もまた太平洋において、また大陸において、この敵を撃たんとしてゐるのである。

東條參謀總長は、「眞軍は國體戦力を盡へ、今や將に好機を捕捉して斷乎敵の戦力を撃破し、以てその戦争繼續意思を徹底的に粉砕しつゝあり」といはれた。我々の使命は大きく、我々の責任は重い。

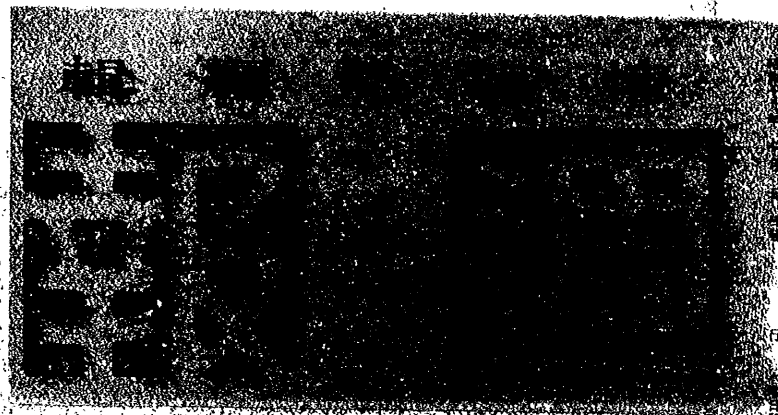
戦局の鍵をにぎる飛行機を、船を、兵器をもつとつゞ造り、そして送らう。そしてこの驕敵をたゞき切る戦力を蓄へ、攻勢移轉の機会をつかまねばならない。

しかもそれは我々の努力に、我々の敵撃滅の闘現にかゝつてゐることが多いのである。

歐洲第二戦線における、盟邦ドイツの健闘に應へる道も、我々が敵を撃つ道も、我々が前線と後方を問はず、ほんたうの日本人の底力を發揮することにつきる。

何よりもまづ、焦眉の急は一億國民の戦産一如の實踐であり、實行である。

日	事
二十二日	二宮總督 東京にあり、精進が故なり
二十三日	乃木希典 陸軍大臣にあり、精進の様子なり
二十四日	乃木希典 陸軍大臣にあり、精進の様子なり
二十五日	乃木希典 陸軍大臣にあり、精進の様子なり
二十六日	乃木希典 陸軍大臣にあり、精進の様子なり
二十七日	乃木希典 陸軍大臣にあり、精進の様子なり
二十八日	乃木希典 陸軍大臣にあり、精進の様子なり



昭和二十一年七月五日 陸軍省 陸軍部 陸軍教育課 陸軍訓練部 陸軍訓練部 陸軍訓練部

隣組・職場で必ず回覧を

本誌に限り 十銭

防空必勝の訓

必勝防衛陣を強化せよ
北九州地区空襲戦訓
空襲時の非常対策

七月五日 號
401 合併號
402

防空救護圖解



情 報 局 編 輯

週 報

昭和十九年七月五日 星期一

隣組・職場で必ず回覧を

本誌に限り 十銭

防空必勝の訓

必勝防衛陣を強化せよ
空襲時の非常対策
防空救護

七月五日 併合号
401
402